
黒い竜と白い竜

タカチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い竜と白い竜

【Nコード】

N8196Z

【作者名】

タカチ

【あらすじ】

俺は落ちこぼれとして生きてきた。きっとこれからも同じだとあきらめていたが、ある日一匹の竜と出会い運命の糸に大きく翻弄されることになる。

車は浮かないが、竜が飛んでいたりと、軌道エレベーターがあったり麒麟が駆けたりする世界で2匹の竜が作り出すストーリー。

文才など一切ないので、細かいところを気にしないで頂けると幸いです。

出会う（前書き）

かなり前から自分の中で妄想していた物語です。

自分がどこまで続けられるか分かりませんが頑張っていきたいと思っています。

一応バトルも起こり、どこまで描写するか分からないのでR15をつけさせて頂きます。

出会う

朝焼けの時間が終わろうとしていた。

そして、夕闇の時間が目を覚まし身動きを始める。

（ああ……、そろそろ起きなければ。私の守るべき人が生まれてしまふ。）

まだ覚醒しない意識のなか最初に思った言葉がそれだった。

あの人の面影を見つけては喜びを感じる自分に憤りを覚え、それを望んだあの人には若干の憎しみをこめる。

まどろみの中過去を思い出していると不意に言葉が落ちてきた。

「起きたか？」

この領域に私以外で唯一入れる人物。

ここなら本来の姿で良いのに彼はまだ人の姿をしていた。

「今、起きる」

腹ばいになっていた身体を起こし、一息ついてから借りの姿になる。

「相変わらずお前の見た目は目を引く物があるな」

「私は白の方が好きよ。真っ黒だと気分が落ち込むわ」

「こっちは、こっちでめんどくさい事も多いがな」

互にくすくすと笑い、久しぶりの会話と楽しんだ。

毎回覚醒時にはこのようなやり取りが繰り返される。

「ところで、頼みがあるんだ」

いつも以上の笑顔を彼は私に向けてきた。

なに？と聞き返す所で、彼女の意識がぼやけ始めた。

「え……？」

「俺、少しやりたい事があるからまだ暫く寝ててくれない？」
へたり込んだ身体が言う事をきかない。考える事も億劫になつてくる。

（そんなことしたら、バランスが崩れて世界がめちゃくちゃになる……！）

「大丈夫だよ、30年ですべて片づけるから。すべて終わった後に、君を起こして上げる」

「こんな世界は替えた方がいいんだよ、一回リセットしよう」

日常

2月14日、明後日は俺の誕生日俺にとって人生を左右する大きな意味を持つ日だ。

普通の14歳はこんなに悩んでいないと思う。

皆生まれて直ぐか、15歳になるまでには加護を貰う。

貰わない人間もいるが少数だ。この少数には決して入りたくない。

加護を貰っていないからと言って、差別されることはない。公には……。

「ああー、俺の人生もここまでか……、短い人生だったなー」

学校の帰り道に独り言を言う。加護がないからと言ってあからさまな苛めを受けたことはない。これから加護を貰いクラスの子の守護龍や精霊を超える何かを連れてくるかもしれないからだ。だからクラスの皆は仲好くしてくれている。

しかし、明後日からは違う、確実に加護を貰えない。そんな弱い人間を中学生が放置しておくわけがない。

「くそー、彼女も出来ないまま終わるのかよ」

「そんな卑屈な奴に彼女は出来ませーん」

「どっから出やがった!」

こいつは幼馴染の清水ハルカだ、馬鹿力で成績優秀、見た目も愛らしく俺以外には優しい。まったくもって迷惑な性格をしている。

「はー、お前にはわからないよ。生まれて直ぐに麒麟に愛される人

間なんだからさー」

「そーゆー所でひがむのは悪い癖だよ？それに明後日までに守護が貰えるかもしれないし。」

「楽天的でいいよな。最近夢見も悪いし良いことねーな」

「もらえなくても、あんたには私が付いているんだから問題ないでしょー！！」

バシーンと背中を思いっきり叩かれる。

なんだこのツンデレは、馬鹿力がなければ萌の1つくらいさし上げるんだが。

「で、どんな夢見てんの？」

顔が赤いから照れ隠しがばればれなんだが……。

ここで指摘しても第二撃を食らうので指摘はしないでおく。

「ああー、女の人が寝てる夢、で俺に似てるけど俺じゃない男の人が俺を連れて女の人の方へ行こうとするけど、そこで起きちゃうみたいなの？」

「いやいや、全然意味わからないから。ちゃんと聞こうとした私がバカだったわ」

そこまで馬鹿にすることないんじゃないかと思いつつ話を続ける。

「女の人を起こさないといけないんだが、どうしても前に進めないんだよね」

「その人に見覚えは？」

「ない……、かな？」

「かなつてなによ？」

「寝ているからよくわからない。でも髪の長い人だよ」

その後はハルカが最近見た夢の事を話してくれたり、明後日の予定

をそれとなく聞かれたりした。

ハル力を家まで見送る。（俺の帰り道にあるため寄り道ではない）

一人になって夢について改めて考えてみる。

まず男の人は誰なんだろう？

俺の未来の姿？なんか違う気がする……、女の方はあの人の知り合
い？必死に起こそうとしてるしな！。

うだうだ考えていると家についてしまった。

「ただいま」

「兄ちゃん、俺今から遊びに行ってくるから。お母さんに言ってお
いて」

「おう、飯までには帰ってこいよ」

手をふり行ってしまった。

弟の幸樹は兄が見ても見た目が良い、そして、大精霊の加護を受け
ている。

精霊は加護を与える者にちょっとした幸運等を与え、大精霊はそれ
を他人にまで分ける事が出来る。そして、それぞれの特性に合わせ
た能力を使う事も出来る。

「俺も精霊で良いから加護が欲しい……」

運命の日

それから再び目覚めるまで煩わしい夢は襲ってこなかった。

朝ご飯を食べ損ねた俺はコンビニに向かう。

弟にプリンも頼まれてしまった。どちらが兄かわからないな……。

コンビニで朝ご飯兼昼ご飯を購入し帰宅する。

重いビニール袋を下げて、家の桜の前を通り過ぎようとしたらいつもと違う光景が広がっていた。

髪の毛

長い

女が

倒れていた。

「え……、これは夢？俺まだ寝ているのか!？」

バタバタと自分の体を触り、ついでに頬も抓っておく。

「痛い」

てことは夢じゃない！倒れているなら具合が悪いわけだからー、と思いつけ寄る。

「大丈夫ですか！？救急車呼びますか！？」
肩をたたくが反応がない。

うつ伏せになっっている体をゆっくり仰向けにして気道を確保する。

脈はある。自力で呼吸もしている。これ以上は俺では手の施しようがないと思い、家に助けを呼ぼうと彼女の傍を離れようとした。

しかし、それは彼女によって阻まれる事となった。

手を掴まれ、まるで逃がさないとしても言うように鋭い眼光で睨んでくる。

「だいじょうぶ」

掠れた声で女がつぶやいた。

「大丈夫って倒れている人に言われても信用できないのですが」

「お腹すいているところ無理して動いたから倒れただけ。だからご飯をくれたら動けるようになる」

あれ？もしかして俺たかられている？そんな慎ましい表情で見られても俺は動じない。

なぜなら俺の弁当を狙っているふとどき者に変わりはないからだ！

「ご飯くれたら良いことしてあ・げ・る」

囁かれてしまった。こんな美人に囁かれて動じない男はいない！！
ごめん母さん俺大人になってくる！！

「は……はい！」

あ、声が裏返ってしまった。恥ずかしい……、変声期早く終わらないかな。

頭が変な方向に暴走しかけたが、とりあえず家に上がってもらい、俺のご飯を分けてやろうと思う。

「そこに座っててください」

今の炬燵に案内し、お茶を入れる。

好みを聞き忘れたから煎茶で良いだろう。

「おまたせしました。ってなにしているんだよ！」

彼女は仏壇に線香をあげ、手を合わせていた。

「勝手にごめんなさい。少し懐かしかったから、私君のおじいちゃんの知り合いなの」

「あー、だから家で倒れていたんですねー、ってせめて家を訪ねてから倒れてくださいよ」

なんかこの人と居ると疲れる。

自称おじいちゃんの知り合いは、俺のパンを奪い食べている。

なんとか守り抜いた弁当をコーラで流し込みながら俺はふと疑問に思ったことを口にした。

「ところで、どちら様ですか？」

「そういえば、自己紹介がまだだったね。えっと、黒雛と言います」

くろびな？変な名前、この人ほんとおじいちゃんの知り合い？

「高取雄輝です。おじいちゃんは2年前に亡くなりましたが、どちらでお知り合いになったんですか？」

「かれこれ124年前かしら？最後に会ったのは敏君がまだ10歳のころだったわ」

え……？この人電波な人？つうか、おじいちゃんの名前違うし！
変な人にはなるべく早く帰ってもらおう。

「えっと、祖父の名前は敏ではないのですが？」

「えー！あーごめんなさい！じゃあひいおじいちゃんかな？。やっぱり長く眠ると時間の感覚狂うわね」

(やばいこの人)

「やばいってひどいわねー。私はこの家の守り神やってるのに！もー知らないどっか行っちゃおうかなー」

「えー！聞こえちゃった！？それより神様ってホント？」

おかしな人の設定が気になって、つい質問してしまった。

「ほんとほんと。あの桜いつも綺麗に咲くでしょ。あれは君の先祖と約束した時に埋めた桜でね、あれを通してこの家を守ってたわけ」

うわー、神様すごい、俺の先祖すごい。
でもなんか嘘くさーい。

「でもなんで神様がなんであんなところに倒れていたの？」

「話せば長くなるのよ……」

神様はいきなり落ち込みだした。

そして俺の運命を変える一言を言い放った。

「そうそう、君誰からも加護貰ってないでしょう？」

「まあ……」

神様まで俺を人間失格扱いするのかと思って頭に熱が登るのを感じた。

「そんなに睨まないでよ。それはしょうがない事だったんだから」

「しょうがないって、なんで初対面の人に言われなきゃいけないんだよ。神様だろうがなんだろうが知らないが、俺がどれだけ悩んできたかわからないだろう！？」

これまでされてきた差別的な言動は俺の心に十分な傷を負わせていた。

神様は申し訳なさそうに目を伏せごめんなさいと呟いた。

「実は、あなたが生まれる段階で私が加護を与えることになっていたの。あなたのご先祖との約束でね。でも、白が邪魔をしてくて私を再び眠りにつかせた。だからあなたに加護を与えるのが遅くなっってしまった。本当に申し訳ない事をしたと思う」

神様はペコリと頭を下げた。

「あんたが俺の守護者？」

「ええ……、黒龍それが私の本当の姿」

信じられない。今まで夢にまで思っていた事が叶うなんて。しかもこんなにも位の高い龍が。

黒と白の龍は四大元素の龍とは異なった力を持ち、この世の理にすら影響を与えるという龍だ。

（一般的には……、お父さんが家の言い伝えを話してくれたのはいつだったろうか、その中で何か重要な事を言っていた気がするが、思いだせない。）

「雄輝に加護をあげたいのだけど、先に言わないといけない事があるの

- ・ 私は今、万全ではなく本来の半分ほどしか力が出せない。
- ・ 白龍に狙われているから、確実にあなたを危険にさらす。

それでも良かったら加護を与える事ができる」

俺の返事は決まっている。

この喜びをくれるなら、俺は黒龍のために戦う覚悟が出来る。

「加護が欲しいです。あなたのことも全部受け入れます！」

(あれ、でも白って……)

「わかったわ。私の加護をあなたに授けます。」

俺の手をとり、彼女の額近くにもっていき手の甲をおでこに押し当てた。

一瞬鳥肌が立った後手の甲に温かいぬくもりを感じた。

相性はよかったみたいだ。

合わない相手に加護をもらうと激痛が走ると聞く。

そして、止まっていた俺の運命の輪が一気に回りだした。

2月13日 夜

2月13日夜

両親に黒雛の事を話したら大層喜んでた。そして、両親は黒雛を14年間待つていた事を伝え、今の世界情勢、曾祖父のことなどの話をしていた。

俺が加護を受けなくても妙に騒がない両親を怪しんだのは一度や二度ではない。俺は要らない子供なのか、何も期待されていないのか等を考え枕を濡らした日もあった。

（知っていたなら教えてくれれば良かったのに、そしたらこんなに悩む事もなかった。）

弟もまさか誕生日一日前に兄が龍を連れてくるとは思わなかったよ
うで、なんだか微妙な反応をとっていた。

（あいつは大精霊の加護を受けて天狗になっていた面があるから、
ちようどいいお灸になったと思う。俺も兄の威厳を取り戻せて凄く
嬉しい！）

実はクロに大精霊がなついてしまい、戸惑いと若干の嫉妬を感じて
いたのであって、雄輝が考えているようなことは一切なかった。

自分の部屋に戻り、俺はベッドに座り黒雛は向かいの学習機の椅子
に座った。自然と向き合う形になり、俺は気まずさを紛らわすため
に話しかけることにした。

「なあ、黒雛さんはなんで白龍に襲われたの？」

「その名前は好きじゃないから、クロって呼んで？」

(今更名前の訂正かよ！)

「あはは、ごめんごめん」

ごまかしたように笑ってるけどこいつ俺の心が読めているのか！？
確か、昼もこんなことがあった気がするし。

「もしかして、心が読めたりするチートパワーがあったりしますか？」

一応聞いておこう。心の安寧のために。なんか涙でそう。

「うふふ、チートパワーの意味はわからないけれど、心は読めない。
でも君たち一族とは付き合いが長いからね。顔を見ただけである程
度はわかるようになったのさ」

おどけてるといつかヘラヘラしているといつか。なんかすごい龍っ
て感じがどんどん薄れている。

「なんで白に眠らせられたかわからないのよ。でも、彼はこの世界
が気に入らないようだったから、手っ取り早く破壊活動していると
思ったのだけれど、無事のようにだし」

さらりと危険な事を言いましたよね？ごくりと唾を飲み込む。

「暴れられたら、被害規模はどれくらいに……？」

クロは胸の前で腕を組み考える素振りをみせた。胸が強調されてグツトです！

「止めが入らなければ1カ月もあれば何とかなるはず。破壊状況にもよるけど。今、白が眠っている夕闇どきと思って、太古の龍達はぼけーとしていると思うから、きっとそれも狙っているのじゃない」

太古の龍？初めて聞いた単語に思考が引き寄せられた。
古い龍？一般的な龍は500〜800年の寿命を持つとされる。

「太古の龍って何？」

クロが驚愕の目でこっちを見た。

「え……、まさか人間はこんなことまで忘れてるの！？」

そんな言葉聞いたことないし、長生きの龍になる予定の龍は目の前にいるし……。

（馬鹿にしたような目で見ないでください。心が折れてしまいます。）

「俺が知らないだけでほかの人なら知っているかも……？」
クロに睨まれ続け最後のほうの言葉は消えてしまった。

「また、仕事が増えたわね。まあいいわ。これは明日説明します。
今日はいろいろあって疲れていると思うから寝なさい」

それには賛成なのだが、なぜ俺の部屋に布団を敷く？

「あれ？今の私隠業出来ないって言ってなかったかしら？」

全然聞いていないので首を振った。ちよつと頭がフラフラする。

「隠業すると白にばれちゃうのよ。だから、しばらくは実体化したまま過ごすことになります。だから明日は買い物に連れて行ってね」

ハートが飛び出すようなウインクをされても嬉しくない！

うら若き男子が元はなんであれ、綺麗なお姉さんと寝るのは精神衛生上宜しくない！

襲つてもいいけど、後悔すると思うから気をつけてね。という嬉し
いような悲しい言葉を残してクロはさつさと寝てしまった。

（クロも疲れていたのか、そりゃあ、家の前で倒れていたしなー）
ごちゃごちゃと考え事をしていたが、瞼が重く感じたと同時に寝て
しまった。

寝たのかな？

今日は疲れた。熟睡していたところ叩き起こされるし、弱っている
ところに加護を与えたし。

しかし、この子はあの方によく似ている。顔も声も、性格はまあ違
うけど……。

もしかしたら白はこのことに気づいて契約を妨害しようとしたのか？

しかし、ここまで忘れられているとは、私たちの存在意義もあった

ものではないわね。世界は人間のためだけにあるわけではないから構わないのだけれど。とにかく一回おじい様に合わないといけないわ。飛ばばあつというまに行けるから、雄輝も連れていきましよう。

白は何をしようとしているのかな……。

クロは対の存在のシロに思いを馳せながら眠りについた。

2月14日 日曜 (俺の誕生日)

2月14日 日曜 (俺の誕生日！)

くぁー、と欠伸が聞こえてきた。昨日から俺の部屋に居候している龍の声だろう。

からかってやろうと思えばベッドから寝ている姿をのぞきこんだ。

枕に黒くて長い髪が広がり、シャツが大きいのか首筋から肩までが露わな姿になっていた。

朝なんだから男の子に不用意な刺激を与えないで！

寝ている顔だけ見ていると、肌が透けるように白く人形のように整った顔をしている。そういえば、他の龍をマジマジと見たことはないが、髪や瞳の色が属性の色に対応していると聞いたことがある。

黒目黒髪、改めて、黒龍なんだなとしみじみ考え、言われなければ龍だとは気付かないだろうなと思った。

暫く眺めていたら突然クロの目が開かれた。

眺めていたわけだから必然的に目があっってしまう。

気まずい沈黙が流れ、クロににらまれ続けることになった。

「ねえ、なんかいやらしい目で見ていなかった？」

う………！

「見てねーよ！」

正直に見とれていましたなんて言えねー！！

「まあ、見られて恥ずかしがる年齢はとうに超えているから気にしてないわ。遠慮せず触っても良いのに」

ニタニタ笑いながらクロは俺を言葉攻めしてくる。

こつこつ趣味の友達がいるから紹介してやろうかなと思いつつ、どきまぎした気持ちを落ち着かせることにした。

朝ご飯を食べ終わった頃に今日の予定を聞かれた。

「ああー、遊ぶ約束はしていない。夜に帰ればそれで良い」
誕生日会を開く歳でもないしな。決して友達がいなくてかではない。
断じて違つぞ！

「そう、じゃあ今日はさっさとおじい様のところへ向かい、私の買い物をしてから、雄輝に加護の引き出し方を教えましょう」
クロはうんうんと一人で頷いている。

俺の事は後回しですね。わかります。

(早く加護の力使ってみたいな……)

「雄輝の訓練はいつまでかかるか分からないから、後回しよ？
だいたいお母さんに進学の事とか全部任せてあるのだから時間なんていくらでもあるでしょっ?」

うわー、言われたくない所言われちゃった。耳が痛いね。

そう、自分の守護者によって学校が変わるのだ。雄輝の場合2月に入ってから、契約を結んだために、今まで入る予定の一般高校から龍の加護を持つ子供が通う高校へと進路が変わってしまった。

（龍属性専門第一高等学校か、クラスメイトも数人行くはずだから不安はそんなに感じないけど……）

主な教育は一般教育、龍の加護の使い方等である。そして、龍の加護は戦闘向きが多く、戦闘訓練や、国防についてなども教えられ、この学校をでた生徒は戦争時に駆り出される制約がある。それが嫌で一般高校に通う人もいる。

しかし、この学校に通えるというのはエリートの証であり、学費も格安、これからの人生に明るい光が差し込む事間違いないのである。そのほかにもいろいろ特典盛りだくさん！

「じゃあ早くおじい様とやらに会いに行こうぜ」

「そうねー。寒いと思うから、なるべく厚着してきて。私は外で待っているから」

クロはそそくさと外に出てしまった。

あいつは炬燵に未練を感じないようだ。なんとなくうらやましい能力！

ニット帽をかぶりマフラー、手袋つけコートを羽織り準備万端、どんな寒波でもきやがれるな装備で外へ出たら目の前が真っ暗になった。

「へ？」

黒くて

細長い

角が生えた

龍が俺を見下ろしていた。

リニアで行くんじゃないのか……、つかクロはリニアってして
いるのかな？

つか行き先どこ？

呆然と立ち尽くし、クロの艶やかな鱗を眺めていたら上から声が降
ってきた。

「早く乗りなさい」

「飛んで行くの？」

「もちろん」

「遠いの？」

「飛んで1時間くらいかしら」

「リニアで行かない？」

「なにそれ？」

「ワアオ」

結局飛んでいく事になりました。

（お母さん、死なないように祈っていてください）

「雄輝、私は載せた人を落としたことがないのが自慢なのよ？」

「俺が落下第一号にならなきゃ良いけど。あと心を覗かないでくだ
さい。死んでしまいます」

初めての空はそんなに苦痛ではなく、むしろ癖になる類のものだった。地上を見下ろし風が当たる感覚を楽しんでいるとあっという間に目的地に着くことが出来た。

のも足りない分は帰りに楽しもうと思っ。

会いに行こう

鬱蒼とした木が茂り冬の割に生温かい風が吹く場所に連れてこられた。

どこからか硫黄の匂いがするから温泉があるのかな？

「着いたわ」

「ぜえぜえぜえ……、

クロがものすごく疲れ果てている。顔色も悪いしふらふらしているし。

「ちょっと休もう！なんで死にかけているんだよ!？」

「久々に飛んで、ちょっと呼吸がしにくかっただけよ。普段は隠業して行動するから、飛行は慣れていないの」

「さつき、人を落としたことないって言ってなかった!？俺だまされたの!？」

「はあ……、落とした事はないわよ、だってあんまり載せないもの」

やっと息が整ったのか会話がスムーズになってきた。

「詐欺に遭った気分」

「楽しんでいた癖に良く言うわ。帰りはもっとスピード出して上げるからね」

「うわー、こんなツンデレいらないです。誰か俺にデレデレな子をください！切実に!！」

「所で、おじい様ってどんな人？」

「太古の龍の一匹で、東の観察者よ。創世期あたりから世界を観察している方で、とっても大きいの」

「漠然とすぎていて全然わからない」

（だから、馬鹿を見る目でこつちを見ないで！）

「私や白が困った時にアドバイスを求めたり、天変地異が大きすぎて、私たちの力だけじゃあ足りない時に力を貸してもらっているのよ。最後にあつたのは北の方の火山が爆発したときに力を貸してもらったわ」

（あとは、私たちが力を暴走させてしまった時のストッパーの役目も負っているわ）

北の火山って何年前の話だ？クロの話している昔話はいまいち時間の感覚がつかみにくい。

「観察者の割に結構活躍していない？」

「まあ、観察対象がいなくなったら困るでしょう？これは人間だけでなく他の生物も含めだけ。では、おじい様に会いに行こう」

腰かけていた岩からおり、苔むした倒木の上を歩いていく。

神聖な空気というものはこういうものを言うのだろうな、と思わせる空気が徐々に濃くなってきた。ちよつと息苦しい。クロみるとイキイキしているように見える。

クロも神聖な生物のはずだから当然か。

（俺、どうせ汚い人間ですよ……）

しかし、大きいと言っていたから直ぐに見つかると思ったがそうで

もないらしい。
しばらく歩いていても、それらしきものが視界に入ることにはなかった。

そうこうしていると、大きな湖の前に出てしまった。霧がかかって見えにくいがかなり広い湖だと思われる。

周りには時期外れのツツジ等が咲いていた。きっと一年中暖かいのだろう。

「何にも見えないんだけど。それに、これは温泉？」

「そうそう、温泉。ちょっと温めただけれど」

クロは手をお湯に付けて温めていた。俺もマネしよう。

「お湯のわりにヌルついている気がする」

「これがお肌に良いんだって。お母さんがいつていたわ」

昔を思い出したようで目を細め遠くを見つめている。

クロの昔なんてさっぱり想像できないけど、纏った空気が柔らかい事からきつと良い思い出だったのだと思う。

「さて、おじい様の許へ行きましょう。私と手を握ってくれる？」

差し出された手は温泉を触った手で、手を繋いだ後に後悔と煩惱が押し寄せた。

暖かくて、ぬるぬるしていて、クロの手は柔らかくて、最高です！！でもその後の行動で一気に現実に戻されることとなった。

「そのまま入ったら溺れるって！一緒に入水でもすんの！？俺まだ

死にたくないよ？」

何とクロは湖に入り始めたのだ。温泉に入りたいと思っ
ていてもこんな状況では楽しめるはずもないし、溺れてしま
う。

「大丈夫、おじい様の領域に行くだけだから」

そう言っ
て俺も湖の中に引きずり込まれた。
あんまり泳げないんですけど……。

おはよう

溺れるのを覚悟して息を止め眼を瞑っているとクスクス笑われていることに気付き、クロの手を握り締め恐る恐る眼をあけると目の前には草原が広がっていた。

緑の絨毯が広がり、野兔が駆け、小鳥が舞っているさまは、まるで絵本の世界のようにここが湖の中だとは思えない。だが遙か上空には水面が映り、静かに波を立てているのがみえる。

その中でも一際目を引くのが薄ら灰色と緑を基調とした小山だ。岩山のように、表面はごつごつとしている。高い木は生えていなく、苔や低木、野草などが生えている用だ。

なんとなく予想は付いているが質問をしようと思う。

「もしかして、あれがおじい様？」

「はい、今日は一段と苔むしているようですね」

そうかー、いつもより苔むしているのか。ところで呼吸している様子すらないのだが、生きているのだろうか。ちょっと心配になる。

「さて、起きていただきましょう」

クロは繋いでいた手を離し、水面に向かって手を伸ばし何やら掴んで引きずり下ろす動作をした。

それからの光景は衝撃的だった。

それは、風呂の水が抜けている様子を下から見ているようで、上から落ちてくる水の柱が岩山に落下し水圧と水流で苔や低木をはぎ取りみるみる白亜色に変わって行った。

そして、水は高いところから低いところへ流れるので濁流になって俺たちに押し寄せる。

「ちよつと、待ってー！！水来ているから！！」

「大丈夫大丈夫、この水は常に上にあるように設定されているから。私の力が関与しなくなれば上に戻るわ」

濁流が来るのに平然としているあたりが人間とかけ離れているが、せめて俺にも教えて欲しかった。教えていってくればこんなに取り乱したりしなかっただろうし、こんなことが続いたらびっくりしすぎて髪がすべて白髪になってしまう。

「派手な行動をとる時は前もって言うておいてくれない？俺寿命が縮みそうなんだけれど。さっきもいきなり池に入るとか止めて欲しいし」

「あれ、もしかして雄輝は意外とビビりなんだね。これは驚かし甲斐があるってものじゃないのー！」

もしかして、いたずらっ子キャラですか？いい年こいた龍が？身体は大人、頭脳は子供とか止めてください。

そうこうしているうちに、水が一か所にまとまりだした。大きい水滴の様な形になったそれは、僅かに薄くなった水面に吸い寄せられるかの様に上空に戻っていき、タプンという音と共に一つになっ
て行った。

次に地響きの音が聞こえてきた。ズズズ、ズズズ、ズズン。目の前にいた大きな龍がこつちを向くために移動を開始したのだ。

おじい様とやらは、4足歩行型の竜でどっしりとした足つきでこちらに向かって来ようとすする。
少し怖い。

龍にも様々な大きさや色形がある。一般的に西洋型のドラゴンや、東洋型の龍、そしてトカゲの様な4足歩行型の龍などである。

四足歩行型でも飛行することは可能だがドラゴンや龍のように速度は出せない。しかし、土の中を高速移動できるというメリットがある。そして、だからと言うべきか土属性の龍に4足歩行型が多い。

ちなみにクロは東洋型の黒い龍だ。サイズは変更可能らしいが、通常サイズは長さが約1キロの太さ直径で10メートル〜20メートルらしい。本人もすっかり計った事はないと言っていた。

俺が背に乗せてもらった時は5〜8メートルほどの長さだったようだ。

おじい様の移動は3分ほどかかり完了した。

「おはようございます」

「おはよう」

おじい様の声は素晴らしく低く、地響きがまだ続いているのかと思うほどだった。

「私は常々言っていると思うが、水をかけて起こすのはやめたまえ。年寄りにあつた丁寧な起こし方があると云つておろう?」

「しかし、直ぐに起きて頂きたかつたもので」

クロはしらーっと言っているが、こいつ次もあの起こし方をするつもりだな。暇なときでも絶対にあれをやるぞ。そして、おじい様の前だと幾分かしゃきつとする様で、いつものふざけた雰囲気は伝わってこなかつた。

「お伝えしたい事があります」

「ふむ、なんだい?」

ちなみに俺やクロのしゃべりの速度を1とするとおじい様は5位になると思う。これは増えるほど遅くなる。様はおじい様しゃべるのめっちゃ遅い!

そしてクロは目をつぶり無言になった。これは思念での会話をしている様子だ。龍や麒麟が会話するときを使う方法で、これならおじい様の会話速度が上がるだろう。

俺には聞こえないけど。

(いつもどおりでこれなのか、俺に聞かれたくないからこれなのかはさっぱり分からないが)

長くなりそうなので草原に座り野兎と遊ぶ事にした。人懐っこい様でなでられていると目を細め喜んでるようだった。

30分ほどそうしていると会話が終わったようで、クロとおじい様は別れのあいさつをしている。

おじい様は俺にも別れの挨拶をして再び蹲る様にして眠った。

後から聞いた話だがおじい様とクロの血は繋がっていない。他の龍と違いクロたちは世界が前任者の寿命を感知すると、前任者の前に卵が現れると聞いた。そして、前任者は次の代の教育が終わると世界に同化し生涯を閉じるらしい。

何だか龍の世界って複雑。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8196z/>

黒い竜と白い竜

2011年12月29日07時49分発行